

Newsletter vol. 21

グローバルワールドを直接経験してみよう

学長 福井 憲彦



インターネットや国際金融市場のことを引きあいに出すまでもなく、あるいは食材や海外ブランドを想い浮かべるまでもなく、なんと世界はつながりあい、ものごとが地球規模で動くことが当たり前になってきたのか、という感を強くする今日この頃ではないだろうか。テロリストの国際活動などという嫌な話もあれば、国境なき医師団による過酷な状況下での医療活動みたいな素敵な話もある。いやおうなしに地球各地の結びつきが強くなっても、一人ひとりの人間から見ればグローバルワールドは広く多様だ。

大学生も、授業をまじめに受け、クラブ活動を一所懸命するとなれば、それなりに忙しい。しかしそれでも、ビジネスの世界や社会活動の世界、私のような大学組織を動かす役割などについてみれば、忙しさはおそらく学生の皆さんの想像を絶している。大学生の特権は、人生で一番自由時間を手にすることが可能だ、ということではないだろうか。これを君たち自身にとって有効に活用しない手はない。

日本の各地を歩いてみるのもよいだろう。新幹線や高速道路で通り過ぎてしまっただけではいけない。歩いてみることで、思わぬ発見をいくつも手に入れることができるに違いない。足元の目白界限でもそうだし、東京都内でもそうである。まして、地球世界は広い。おまけに、出かける手段は、われわれの世代が君たちの年齢であった時代に比べれば、いや比べようもないくらい、多様で便利で安くもあげられる。

私をはじめ外国に出かけたのは1974年のことだから、もう歴史的過去の時代だ。オイルショックが衝撃を残し、国際通貨が変動相場制に変わって間もないころだ。フランス政府の国費留学

生としてバりに旅立ったのであったが、今のようにバック旅行がある時代でもなければ、飛行機の便も少なく高かった。国費留学生というのは、たいした奨学金が出るわけではなかったが、それでも2年余りの滞在期間に、フランスとその周辺はそこそこ貧乏旅行してまわった。すでに私は大学院生で20代終わりだったので若くはなかったし、予備知識も仕入れ済みで行ったので、それほど驚愕するようなことはなかった。それでも、同世代のフランス人夫婦との付き合いをはじめ、人との出会いから貴重な経験をし、習慣の違いを学び、何があっても驚かないくらいの度胸はつけさせてもらったように思う。この友人夫婦はロシア正教徒で、彼らに生まれたお嬢さんの名付け親（フランス語でいうパラン、英語のゴッドファーザー）を頼まれるなどは、思い切って行っていなければありえない人生経験だ。私の場合、学問上の成果よりも、むしろ人生のプラスのほうが大きかったかもしれない。お金を出してくれたフランス政府には申し訳ないが。

現在でも、長期に留学しようと思えば資金はかなりかかる。しかし長期でなくとも、サマースクールのようなチャンスも含めて、今では機会はいっぱいある。もちろん学習院大学の協定校に行けば便宜も図ってもらえる。大学としても、留学支援の奨学金をさらに充実させなければいけないと思っている。若いうちの直接経験は貴重だ。欧米でもよいしアジアでもよい。外に出てみれば、日本のことをもっと知らないと恥ずかしい、とも思えるだろうし、日本のよさにも気づくだろう。地球世界は広い。若いうちにさまざまな人たちと直接出会って、貴重な経験をし、人生を豊かにするためのストックを増やしてほしい。

Be Ambitious !

経済学部経営学科4年 伊藤 純一
(2006年~07年 Ferris State University 留学)



▲インターナショナル生のピクニック(大学の近くの公園にて)



▲ナイアガラの滝にて(カナダサイドから)

中学卒業を控えて、高校に留学制度があることを知って海外留学に興味を持ったのがきっかけである。英語の面白さを覚え始めた時期だったということもあり、当時はただ面白そうという気持ちが先行していた。人種のつぼと言われるアメリカなら新しいことも豊富だろうと考えていた。準備を整え、出願をしようとした時にアメリカでテロが起こり、断念を余儀なくされた。

大学の合格通知をもらい、時間に余裕が出来た時に再び留学の事を考え始めた。国際交流センターに赴き、詳細を聞かせてもらった。まずは入学をしないと出願資格がないということだったので、高校卒業までの時間はTOEFLの勉強に充てながら少しずつ準備を進め、4月に留学のオリエンテーションに参加した。協定留学はとても魅力的だったが、自分の目的には満足に当てはまらなかった。自分はひとりでどれくらい出来るのか、海外の学生がどのように考えているのか、海外の教育体制はどうなっているのか。これら3点が達成出来るのは協定内よりも協定外だった。

スタートはガイドブックだった。College Board出版のInternational Student Handbookを購入して、片っ端から大学を探した。大学の資格条件や寮の有無、学費などの一覧が掲載されている良い本である。日本人があまりいない地域に絞っていくつかの大学を選び出し、インターネットで詳細を確認して、オンラインや郵送で出願した。数日後に連絡がある大学もあれば、現在に至るまで何もない大学もある。連絡のあった大学に関しては、実際に現地に行ってキャンパスツアーに参加し、大学の雰囲気を確かめた。その後、いくつか奨学金の申し込みをし、合格通知に同封されていたI-20と他の必要書類を用意して、アメリカ大使館にビザを申請した。文章では数行だが、ここまで半年以上の月日を要した。国際交流センターには何度も顔を出し、何回お世話になったかわからない。

最初の2ヶ月間は想像以上にきついものだった。ある程度は出来るだろうと自負していた英語が上手く使えず、学術的な面ではついていくのも大変であった。8時に起床して、9時から12時まで授業に出て、午後から就寝まで図書館でレポートや予習、復習に追われた。テストの近い日などは朝の5時まで起きていたこともしばしばで、こうなってくると自分をどこまで追い込めるかが勝負。幸い体力には自信があったのでなんとか乗り越えることが出来た。教授は事前に授業の範囲を学生に伝えて、教科書のその部分を読んでくるように指示する。そして、授業では学生が内容を把握しているという前提で話を進める。授業の形式は日本の大講堂授業のようなものではなく、教授と少数の学生とのゼミ方式で、まるで考えのキャッチボールをしているような感じ。勉強の環境としては最適だった。

なぜ自分が厳しい環境でやってこれたか。大部分はインターナショナル生の仲間がいたからである。日本人はいなかったものの、似たようなバックグラウンドを持つ世界各国からの学生とはすぐに仲良くなった。同じ苦労をし、同じような問題に直面するので、お互いに助け合って一緒に

頑張ってきた。教授たちは何人ものインターナショナル生を見てきているので、何度訪れても快くサポートをしてくれた。もちろんクラスメートの存在も忘れられない。教授のいない時間帯に困ったときなどは彼らに助けをもらった。さすがに「図書館に住んでるの?」と聞かれたときは自分でも笑ってしまった。図書館では曜日によって多少違うものの、利用する学生の顔ぶれはあまり変わらなかった。次第に友人が増えていくのも楽しかった。また、学生に共通していたのはオンオフの使い方が上手いということ。平日は勉強している学生が多いが、金曜の夜は図書館は空っぽ。出来るだけ現地学生の誘いは断らないようにして、やりたいと思ったことは全てやるようにした。特に、アメリカまで来て、やらずに後悔することだけはしたくなかった。

常に厳しかったわけではない。最初の長期休暇では初のロードトリップ。30時間以上運転して、ミシガンの自分の寮からカナダとの国境を越え、ナイアガラ、トロント、オタワ、モントリオールを友人2人と旅した。年末はカリフォルニア全土からラスベガスを見て回り、スケールの違いを実感した。ここでも常に新しいことに挑戦して、出来るだけ有意義な時間を過ごそうと心掛けた。

これから留学を目指す人たちに。僕がこの留学生活を通して得たもの、実感したものは自信。自分で全部を調べて、自分の力でやりとげれば、達成感も大きく、これから何か問題が起こってもどう対処すればいいのかおのずと思い浮かぶはず。いつもはどうしようか迷うことであっても、ちょっと興味があつたら、すぐにかぶりつくくらいが良いと思う。せつかくここまで来て何やってるの?と自問自答しないように! 失敗したときは反省しても良いけれど、後悔はしてはいけない。常に自分を信じて、頑張ってください。やったもの勝ちです。あつという間に時間は過ぎていくので、イベントが転がってきたら出来るだけ参加し、何かあれば自ら突っ込んでいく! 積極性が養われる一方で、それが自分の持ち味に変化します。日々楽しいのは間違いない! 大事なものが得られるのは保証しますが、それが何かは自分で確かめてください。Be ambitious!

世界の国から いただきます。



イタリア編
carbonara カルボナーラ

今回は、国立ナポリ東洋大学からの協定留学生 メルリーニ ベネデッタさんに手打ちパスタとカルボナーラの作り方を教えてもらいました。

ベネデッタさんは、イタリア中部のラチオ州タルクイーニアの出身。そのラチオ州の州都であるローマの伝統的な料理、「カルボナーラ」を選んでくれました。みなさん、「カルボナーラ」がもともとローマの伝統料理だとご存知でしたか?

ベネデッタさんは、料理好きで、その腕前もかなりのもの。これまでも、ランチにたびたび手打ちパスタのペペロンチーノやかぼちゃのリゾットなどおすそ分けしてくれたのですが、どれもとてもおいしかったです。もちろん、「カルボナーラ」もお相伴に預かりました。クリームを使用しないレシピなので、濃厚さが苦手な人でもおいしく召し上がれますよ。ベネデッタさんに、料理のコツについて聞いたところ、「心を込めて作る」という答えが返ってきました。シンプルな回答ですが、料理の真髓についている言葉ですね。

イタリア語で「いただきます」は、buon appetito (ブオン アッペティート)と言うそうです。では、みなさん、buon appetitoを楽しみに、料理に取りかかりましょう。

アートの身近な国イギリス

▼イギリス人家庭での伝統的なクリスマスディナー

文学部哲学科4年 酒井 千波
(2006年~07年 Oxford Brookes University 派遣学生)



▲イギリス・ワイト島にて(左側は同じく本学からの派遣学生 三崎望樹広さん)



▲テムズ河畔のHenley on Thames(ヘンリー オン テムズ)にて

「協定留学」とひとくちに言っても、留学先で経験できることはまさに十人十色。なんとなく「留学してみたいなあ」という気持ちがあるものの、実際にどんなことができるのかも想像がつかないし、はっきりした目的もわからないから応募するに踏み切れない、というもやもやした気持ちを抱えている人は意外に多いのではないのでしょうか？ 留学するに至った経緯や実際にどんなことをしたか、私の経験をお話したいと思います。

留学したいという気持ちを決定的にしたのは、私の場合、実は何よりもその必要性でした。私の専攻は西洋美術史、将来は美術館で働くことが夢です。美術館で働く学芸員の多くは留学経験者、学芸員でなくとも、芸術の世界で働く人々にとって英語が話せるというのは当たり前のことです。このような状況に後押しされて元々興味のあった協定留学に応募することに決めました。

私が留学先として選んだのは、イギリスのオックスフォード・ブルックス大学です。現在の研究がイギリス美術であること、また、将来のことを考え、英語能力は必要不可欠ということから、留学先は迷わずイギリスに決

定。次に大学ですが、専攻の美術史に加え、他の協定校にはないアートマネジメント学科のあるブルックス大学を選びました。

オックスフォード・ブルックス大学での生活は、日本では忙しい生活をしてきた私にとってはよくバランスの取れた、シンプルなものでした。私たち協定留学生は、どの学科のどの授業を取ることも許されていたので、私は専攻にしている美術史、アートマネジメントの授業に加え、留学生向けのアカデミックスキルの授業や日英翻訳の授業なども取りました。やはり英語の授業についていくのは大変なことなので、基本的にはいつでも勉強していた、という印象ですが、大きなレポートの後にはごほうびとして友達と飲みに行ったり、天気の良い日に手作りサンドイッチをたくさん持って、公園にピクニックに行ったりもしました。

オックスフォードの街には、美術館や博物館がたくさんあります。そのほとんどはオックスフォード大学に所属するもので、入場料は無料。空いた時間には同じ美術館や博物館に何度も何度も訪れました。観光地としても名高いオックスフォードの街はこういった点でも本当に魅力的。いくら時間があっても足りないくらい見るものはたくさんあるし、これらの美術館はどれをとっても本当に興味深いものでした。また入場料が無料なので、美術館と人々との距離がとて近しいということも私にとっては新鮮でした。観光客はもちろん、私のような学生やそして地元の家族連れなどなど、いつも美術館の中は賑わっていて、日本とは大きな違いを感じました。

そんな美術館や博物館、ギャラリーが人々にとってとても身近な存在であることに触発された私は、夏季の三ヶ月間をロンドンのアートギャラリーでボランティアとして働きながら過ごすことに決めました。英語での履歴書の用意から面接、実際に働く中で英語での接客や電話対応など、私にとっては全てが初めてのことでした。友達に囲まれていたオックスフォードでの寮生活とは一転、ひとりぼっちになりましたが、新しい人々と出会い、アートの盛んなロンドンでのボランティア経験は私にとってとても貴重なものとなりました。

「留学したいなあ」となんとなく感じている方がいたら、私も始まりはそうでした。この「なんとなく」の気持ちを、実りある一年に変えるもの、それは明確な目標だと思います。具体的である必要はありません。漠然としていてもはっきりとした方向性があれば、留学先の選択から、留学中出会う様々な可能性でも、良い選択ができるでしょう。私も留学してみたいとなんとなく感じていた頃は、展示会の宣伝係りとして、ポスターやチラシを鞆いっばいにつめて、ロンドン中のアートギャラリーを訪問することになるとは想像もつきませんでした。「なんとなく」の気持ちは大きな可能性を秘めています！ 思い切って国際交流センターの扉を叩いてみて下さい！！

ITALY



手打ちパスタ

●材料 (4人分)

卵-4個 小麦粉-400g 塩-少し

●作り方

- 1) 卵と小麦粉と塩をボウルに入れて、混ぜる。
- 2) 材料はボウルの中で丸める。
- 3) めん棒で生地を薄く伸ばす。
- 4) そのまま30分ぐらい寝かす。
- 5) 耳たぶぐらいの硬さになったら、細く切る。
- 6) 少し硬めにゆでる。

カルボナーラ

●材料 (4人分)

スパゲッティ-400g 油-おおさじ2
玉ねぎ-1個 卵-2個
ベーコン-200g イタリアンパセリ-少々
パルミジャーノ(チーズ)-150g 塩-おおさじ1

●作り方

- 1) 鍋に油を敷き、弱火で温める。
- 2) みじん切りにした玉ねぎを鍋に入れる。
- 3) 玉ねぎは狐の色になるまでいためたら、四角に切ったベーコンを鍋に入れる。
- 4) ベーコンはいためて、塩を入れる。
- 5) 卵とチーズとパセリをボウルに入れて、混ぜる。
- 6) 鍋にゆでたスパゲッティを入れて混ぜる。(弱火5分ぐらい)
- 7) ボウルの卵とチーズとパセリを入れて、混ぜる。

BUON APPETITO!!!

平成20年度 学習院大学海外留学奨学金の募集について

本学では、留学費用を援助し、できるだけ多くの皆さんが留学のチャンスを得ることができるよう、奨学金制度を設けています。平成20年度第2回目の募集については、国際交流センターのHPや掲示等でお知らせします。(第1回目の募集はすでに終了しました。)

応募条件：教授会等で留学が許可されているか、
もしくは海外の大学へ出願中の者
奨学金額：1名あたり50万円(給付)
募集人数：20名(年間)
募集日程：

年度	募集時期(応募締切)	応募対象者
20年度	第1回(平成19年12月) 第2回(平成20年6月)	留学期間が ①H20年4月～H21年3月および ②H20年10月～H21年9月の者

※ただし、留学期間が①の者は第1回に応募するのが望ましい。

平成19年度は以下の皆さんが奨学生に選ばれています。

法学部	法学科3年	小木曾 梨沙(アメリカ)
文学部	史学科2年	鈴木 サマンサ(イタリア)
//	英米文学科3年	石田 祐未(オーストラリア)
//	日本語日本文学科2年	須田 恵梨子(イギリス)
//	ドイツ文学科3年	久留島 義信(ドイツ)
//	ドイツ文学科3年	田中 翔太(ドイツ)
//	フランス文学科3年	石井 由香(フランス)
//	フランス文学科3年	吉野 藍(フランス)
//	心理学科3年	森 友香(イギリス)
人文科学研究科	イギリス文学専攻D3年	鷲塚 奈保(アイルランド)
//	史学専攻D3年	青木 俊介(中国)
//	史学専攻D3年	倉嶋 真美(中国)
//	フランス文学専攻D3年	中山 慎太郎(フランス)
自然科学研究科	物理学専攻D1年	安達 正芳(ドイツ)
//	化学専攻M1年	柏木 祐(アメリカ)

()内は留学先国/学年はH19年度のもの

平成20年度大学院学生の国外における 研究発表援助について

本学では海外の学会等で研究発表を行う大学院生に対し、渡航費用等の援助(限度額：10万円)を行っています。昨年度と同様、今年度も後期に募集要項を配布する予定です。詳細は国際交流センターのHPや各事務室の掲示板等を通じてお知らせします。

平成19年度大学院学生国外研究発表援助採用者

所属			氏名
経済	経済	博士後期	野呂 純一
人文	哲学 史学 日文	博士後期	土谷 真紀
			矢沢 忠之
			熊 鶯
自然	物理	博士前期	荒井 健一
			北原 昌嗣
			鈴木 聖子
	化学	博士前期	上野 弘貴
			岡本 真美
			柏木 祐
			杉石 露佳
			遠山 知亜紀
			野田 明希
			福原 和人
			土谷 武史
			山口 省吾
渡邊 自由			
	博士後期	吉田 雅	

※所属はH19年度のもの

2009年度協定留学プログラム(第1期) 派遣学生募集について

国際交流センターでは、2009年度第1期(派遣先：韓国、タイ、オーストラリア、ニュージーランド等・留学期間：2009年4月～2010年3月)の派遣学生を募集します。

募集要項の配付日程、説明会の開催日時等については、おって国際交流センターのHP、掲示等でお知らせします。

第2期(派遣先：中国、アメリカ、ヨーロッパ等・留学期間：2009年10月～2010年9月)の募集は、後期に行う予定です。

国際交流センターボランティア募集および登録更新のお知らせ

国際交流センターでは、留学生対象のイベント(留学生懇親会など)の企画・運営のお手伝い、留学生の相談相手、短期ホストファミリーなどを引き受けてくださるボランティアを随時募集しています。(ただし、学部新1年生は、今学期の登録不可)興味のある方は、国際交流センターまで来室の上、ボランティア登録をしてください。

また、現・国際交流センターボランティアで、今年度も引き続き登録を希望する方は、4月末日までに国際交流センターにて登録更新の手続きをとってください。

※「お元気ですか、センパイ!」はお休みしました。

Newsletter vol.21

April 1, 2008

発行日/2008年4月1日

編集・発行/学習院大学国際交流センター

〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1

TEL.03-5992-1024 FAX.03-5992-1025

http://www.gakushuin.ac.jp/univ/cie/index.html

●編集後記● Newsletterの作成は、毎号、四苦八苦の連続ですが、中でも表紙に使用する写真の選定にはいつも苦労しています。本学は都内にある割には緑に恵まれた、絵になる風景の多いキャンパスだと思えますが、それでも本学を象徴するようなイメージどおりの写真を選ぶのはなかなか大変です。今回は4月号ということで、西1号館の扉の写真を選びました。「扉を開けて踏み出そう!皆さんの前には明るい未来が広がっています。」というメッセージを込めて。

【平成20年度国際交流センター運営委員】

所 長	早坂 信	(外国語教育研究センター)
運営委員	元田 結花	(法学部)
//	Brown, Phillip	(経済学部・外国語教育研究センター)
//	田辺 千景	(文学部)
//	村松 康行	(理学部)
//	宮川 努	(教務部長・経済学部)
//	荒川 一郎	(学生部長・理学部)